

日本人らしく

1954(昭和29)年、憧れのフランスに初めて渡った三岸節子は、「日本人は日本人の絵を描かなければならない」と気づき帰国します。人生の転機や作風の変遷を追いながら、節子の画業を概観します。

ヨーロッパへの憧れ

初期の節子作品には、ヨーロッパ、とりわけフランスの画家の影響が強く感じられます。《花・果実》(No.5)の濃厚な色使いと力強い筆触は、1900年代初にフランスで誕生し日本洋画界でも流行した、マティスらに代表されるフォーヴィスム(野獣派)風の表現が見て取れます。室内画ではほかにもデュフィ、ボナールらにも刺激され、日常の身近なモチーフを想像力をもって様々に展開させ、平面性を強調した豊かな色彩による装飾的な画面構成を試みていたことがうかがえます。

ただ、節子は敗戦後の1940年代後半にはすでに「今日もそして将来も日本の美術日本の絵画の優秀を信じて疑いません。その素質において感性において伝統において、日本の誇り得る最上のものであると思います。」「私どもの努力によって、必ずや日本がこの悲しい汚辱をぬぐい去って人類の歴史に不滅の芸術の業績を残すことを念じてやみません。」^(注1)と、日本人画家として、ヨーロッパ芸術への追随からの脱却を自身に誓うかのように語っています。



《室内風景》 ©MIGISHI

日本人らしく

50歳を目前にした節子は、憧れのフランスへ旅立つことを決意します。前年からパリに私費留学していた長男・黄太郎を頼り、1954(昭和29)年3月に念願の初渡仏を果たします。パリ、南仏カーニュ、スペイン、イタリアなどを巡り、翌年6月に帰国しました。

この渡欧は、節子にヨーロッパ美術、とりわけパリ画壇の閉塞感を抱かせるとともに、日本美術に対する大きな自信をもたらすこととなりました。

「ヨーロッパの旅では、西欧の合理主義、物質文明に反発して、古代エジプトや古代中国に強烈に魅了された。(中略)私は西洋で東洋の精神主義を発見し、救いとした。その後、博物館表慶館※に並んだ埴輪の群れは、これこそまごうかたない、日本そのものであると、民族の深部に感動した。」^(注2)

※東京国立博物館表慶館。1900(明治33)年、皇太子(後の大正天皇)のご成婚を記念して計画され、1909(明治42)年に開館。

帰国後、節子は人間性の原点と捉えた埴輪や土器、中近東・中南米の壺や置物などの原始美術を収集し、力強くシンプルかつ構成的な線で描き、絵画に思想性や民族性を模索するようになります。これら時空を越えて存在するモチーフがキャンバスの中で現実世界と共存する画面構成は、後半期の節子作品に見られる生命力への憧れ、生命賛歌への転機となりました。

「女人短歌」表紙原画

三岸節子は戦後、女性歌人が結社を超えて集った「女人短歌会」の機関誌「女人短歌」の表紙絵を40年以上にわたり手がけました。油彩の大作とは異なった、デッサン画による多彩な表現や豊かなモチーフからは、そのときどきの節子の興味や挑戦を感じ取ることができます。初渡欧から帰国した1955(昭和30)年から、再び渡欧する1968(昭和43)年までの間は、埴輪やインカの壺、エジプトの鷹などの原始美術が表紙を飾っています。

デッサン画について、節子は「切っても切れない強靱な線、一本の線の中に血肉をかけて、民族性までも表現できる、そんな強いデッサンを心がけてゆきたいものです。」^(注3)と語っています。



《「女人短歌」58~61号表紙絵》
©MIGISHI

独自の風景画への到達

1957(昭和32)年からは軽井沢の山荘にひとり籠り、孤独な生活の中でひたすらキャンバスに向かいます。自らとの葛藤の中で描いた作品は、これまで以上に感情や思想が表れ、心象風景としての性格が濃くなります。この地で制作された連作《飛ぶ鳥》には、渡欧前には見られなかった荒々しい衝動や生々しい苦悶、繊細な心情が描き抜かれ、人間の尊厳や誇りがみごとに異形の鳥に投影されています。

1968(昭和43)年には黄太郎一家とともに二度目の渡仏を果たし、20年余りをヨーロッパで過ごします。フランスをはじめイタリア、スペインと、各地の風景を残しましたが、いずれも具象的な風景画というよりは半抽象的な様相を呈しています。幾重にも塗り重ねて作り上げられた重厚なマチエールは、若くして夫を亡くし、女性洋画家の先駆者として時代を駆け抜けた節子が、苦難と変遷を塗り固めて到達した独自の風景画と言えるでしょう。



《飛ぶ鳥(火の山にて)》
©MIGISHI

(注1) 三岸節子「絵画の見方」『美神の翼』朝日新聞社、1949年

(注2) 三岸節子「埴輪物語」『花より花らしく』求龍堂、1977年

(注3) 『現代画家デッサン 三岸節子』芸艸社、1957年